

理論といかに向き合うか

井戸 美里（国立国語研究所）

1. はじめに

- 発表者の専門：
 - 特にとりたて助詞が関わる日本語の現象について、記述的一般化を提示する研究
 - 特定の理論的枠組みを積極的に用いることはせずに、新しい現象のパラダイムを提示することを重視。本発表ではこれを便宜的に記述的研究と呼ぶ。
- 森山(2010)：
 - (1) 「直感的一般化」→「記述的一般化」→「説明的一般化」→「体系的記述」(→「理論化」)
- 特定の枠組みを用いないで記述された文法現象のパラダイムを、特定の理論的な枠組みを用いて再解釈する研究の試みは非常によく見られることである。特定の仮説に立脚する理論的道具立てを用いることで、ある文法現象を反証可能な形で厳密に記述したり、原理的に説明することが期待できる。これは一見すると歓迎すべき展開のように見えるが、一人の研究者が「直感的一般化」から「理論化」までの全てのステップを専門的に網羅するのは現実的に難しい。また、特定の仮説に基づく強力な理論的道具立てを用いて一般化することは、記述のパラダイムを提示した段階では含まれていなかった主張を含むことになり、記述的な立場をとる研究者からすると躊躇われる側面もあるだろう。
- しかし、この発表では、あえて記述的立場の研究者がその主張にまで踏み込む試みの有用性を主張する。具体的には、研究背景の違う研究者との対話によって、自身が暗黙のうちに前提としていた仮定やある種の思い込みを問い直すことになり、見過ごされてきた研究課題の存在に気づくことができる。その研究課題は、「暗黙のうちに」前提となっているもので自問自答では気づくことが困難である。

2. 事例：ダケとシカの「第二陳述」の分析

2.1. 対象となる現象

- ダケ文とシカ文は、主陳述と第二陳述を持ち、ダケ文は肯定的命題を主陳述とし、否定的命題を第二陳述とする。シカ文はこの関係が逆転する。（久野 1999 ほか）

- (2) 水だけ飲めれば、1週間は生きられる。
 - a. 主陳述 : 水が飲める
 - b. 第二陳述 : 水以外のものは口にできない
- (3) 水しか飲めなかったら、飢えてしまう。
 - a. 主陳述 : 水以外のものは口にできない
 - b. 第二陳述 : 水が飲める

➤ 「第二陳述」はいわゆる non-at issue meaning に当たるが、どのような non-at issue meaning なのか？

☆ ダケ文とシカ文の第二陳述は、モーダルや仮定節に埋め込んでも意味が投射しない。つまり assertion のようにモーダルや仮定のオペレータの作用を受ける。→前提や慣習的含意 (CI) ではない

- (4) 授業参観に母親しか来ないかもしれない。
 - a. でも、母親は来ずに、父親が来るかもしれない。
 - b. でも、父親も来るかもしれない。

- この現象のポイント: ダケ文とシカ文の第二陳述は、assertion の一部でありながら、non-at issue meaning である

2.2. 分析の素案の段階 (Ido 2019)

- Ido (2019)での一般化(5)(6)

➤ (5)(6)は、ダケの意味は maximality (最大値演算子) によって計算されるとする Tomioka (2015)の分析に基づいて、「ダケを最大値を用いて分析するのであれば、シカは最小値を用いて分析すれば、両者の鏡面関係を説明できるのではないか」という素朴な発想に基づく。

- (5) $\|x \text{ dake } P\| = [\text{MAX } (P) = \{x\}]$
- (6) $\|x \text{ shika not } P\| = [\text{MAX } (\sim P) = \text{MAX } (\lambda y. y \notin x)]$
- (7) (5)(6)に寄せられたコメント

「(5)と(6)は論理的に同値なので、これではダケとシカの意味をかき分けたことにはならない」

- 発表者は暗黙のうちに、「(5)と(6)は、表記された形が違うのだから、当然意味が異なる」と思い込んでおり、(5)(6)によってダケとシカの意味の違いが捉えられたと考えていた。これは、発表者自身が「意味計算の過程」と「意味計算の結果」を区別して考えるという暗黙の仮定に立脚していたために起きた。しかしこの仮定は自明のことではない (cf. モデル理論的意味論、論理学)。
- (5)(6)の分析はそもそも、「結果的に同値になったとしても、その意味の計算過程が異なれば、人間はそこに異なる意味を見出すものである」という仮定を主張する必要がある。ただダケとシカの意味の違いを捉えようとする分析では不十分である。

2.3. 仮説提示と厳密な形式化の段階 (Ido and Kubota (2021))

- 主張：ダケ文とシカ文の第二陳述は、ダケとシカが持つ最大値演算子を用いた本質的意味から副次的に派生する、派生的含意 (derived entailment) であり、本質的意味と派生的含意は、意味論的なステータスが異なる。
 - 最大演算子を(11)のように定義することで、(9)(10)は文の主張と最大値演算子の定義から、それぞれ異なる派生的含意を導く。

(8) 派生的含意：文の前提と主張から論理的帰結として生じる、文の取り消し不能な含意。

(9) $\| \text{dake} \| = \lambda X \lambda P. \max C(P) = X$

(10) $\| \text{sika} \| = \lambda X \lambda Q. \max C(Q) = \max C(\lambda y. y \leq X)$

(11) $\max C(P) = \lambda X. \neg \exists Y. Y \in C * \wedge X < Y \wedge P(Y). P(X)$

2.3.1. 技術的問題発生 of 段階

- 査読コメントでは、下記のようないくつかの技術的問題について指摘が入る。
 - 「20cm くらいだけ」のような領域が dense である場合を扱えるか？
 - maximality は自然数ではなく実数の問題に思われるが、その場合 maximal degree を定めることができるのか？
 - 「ジョンかビルだけ」のような選言を扱えるか？
 - 「日本人だけが知っている (知らない日本人もいる)」のような、表現を扱えるか？
- これらの問題は分析の精密さを詰める作業であり、形式意味論的手法においては定

石的なステップであるが、記述的一般化の段階においては意識されない領域である。

➤ (8)-(11)において共著者間で同意が取れていても、査読に応える段階で方法論の違いが浮き彫りになる。

- これらの厳密化・精緻化の作業によって、一般化の範囲や反例となる現象が詳らかになる。(→鈴木発表を参照) 一方で、たとえ課題として残ったとしても、「assertionであり、non-at-issue meaning である」という意味を派生的含意として分析する、この論文の大きな主張が無効になるわけではない。1つの論文として完成させるためにこれらの分析を詰める必要があるが、(8)がこの論文が提案する主張であり、積極的に取る仮定であるとすると、技術的問題に対応するために立てる仮定は消極的に取る仮定であると考え、論文内では消極的仮定を採用しつつ加筆修正するも、共著者間ではあくまで一時的措置として考えておく。

➤ 記述研究者が理論と向き合うときに、特定の理論的枠組みの方法論全てに迎合する必要はない(逆も然り)。むしろどちらかが全て受け入れてしまうと共同研究としての強みが失われてしまう。「大きな問いと主張」を共有しつつ共同し、それ以外の部分には遊び(消極的仮定)を意識的に持たせておくことで、それぞれが他方の枠組みに過剰に適応することなく、新しい観点を提供することができるのではないか。

3. まとめ

(12) 明示的な枠組み(理論)を持たない記述的研究にも枠組みが存在する。異なる枠組みの研究者と対話することで、自身が与する枠組みに自覚的になり、既存の枠組みに過剰に適応することを避けつつ、新しい観点を取り入れることができる。

- 森山(2010: 19): (理論とは、)
 - 一つの考え方でいろんなことが説明できること
 - 「一貫性」「体系性」「予測性」がある説明原理
 - 言語研究の根幹に何らかの形で関わる原理的なもの
- ここでは便宜上、「特定の理論的枠組みを積極的に用いることはせずに、新しい現象のパラダイムを提示する」タイプの研究を「記述的研究」と呼んだ。しかし、「特定の理論的枠組みを積極的に用いない」ということは、理論的枠組みがないことを

意味しない。むしろ、特定の枠組みを用いていないからこそ、「暗黙の理論的枠組み」に囚われている可能性があるので注意が必要である。森山(2010)の展開に沿って言うのであれば、「直感的一般化」の時点ですでに、何らかの枠組み（理論）の中で直感を働かせていることになる。

- (1)が記述から理論へ、理論から記述へ循環しているのであれば、「良い記述」は既存の枠組みへの違和感を喚起させる記述であり、良い理論は研究者の直感的記述を新たに喚起させる理論である。そのためには、記述的研究者であっても自身が立つ枠組みに自覚的になることは有用である。
- 「暗黙の枠組み」の存在に、同じ研究背景を持つ研究者同士の対話や自問自答で気づくのは困難である。これは、いわゆる記述研究者が、特定の枠組みを用いた理論研究者と対話することで克服できるかもしれない。その際、記述的立場をとる研究者が特定の理論的枠組みを全て受け入れる必要はなく、大きな主張を共有しつつ保留事項を持たせておくことで、それぞれの枠組みへの過剰適応を防ぐことが肝要である。

□ 参考文献

Ido, Misato. 2019. The meanings of *dake* and *shika* based on their maximality and polarity. Poster presented at: Japanese/Korean Linguistics Conference 26, September 2019, UCLA.

Ido, Misato & Yusuke Kubota. 2021. The hidden side of exclusive focus particles: An analysis of *dake* and *sika* in Japanese. *Gengo Kenkyu*, 160: 83-213.

Tomioka, Satoshi. 2015. (Non)-exhaustivity of *dake* 'only'. *Nihon Gengo-Gakkai Dai 150-kai Taikai Yokooshuu* (Proceedings of the 150th Meeting of the Linguistic Society of Japan), 134-139.

森山卓郎(2010)「考えるときの舞台裏—「記述」の段階を中心に—」『日本語学』29(2), pp.14-20, 明治書院.

久野暉 (1999) 「ダケ・シカ」構文の意味と構造」アラム佐々木幸子 (編) 『言語学と日本語教育 実用的言語理論の構築を目指して』 pp.291-319, くろしお出版.

□ 謝辞

本稿の内容は、JSPS 科研費 24K03857 および国立国語研究所共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」の研究成果の一部である。